(注)名古屋地方裁判所豊橋支部平成13年(ワ)第161号,同第第410号,平成14年(ワ)第331号事件の判決(原判決)のうち,87頁から89頁にかけてのイ及びウの部分(原判決引用部分)を抜粋したものです。

イ 1次ボイル槽から2次ボイル槽への鶏卵の移動の際の欠陥について

甲71,証人A16によれば,本件装置が,鶏卵の移動の際に,湯と一緒に移動させる方法をとっていたため,湯量が不足し,補うために燃費がかかったことが認められるところ,加工費用がかかることも,効率が求められる装置においては瑕疵の一つということができるから,本件装置についての瑕疵と認めることができる。

これに対し,被告会社は,湯と一緒に移動させるのは,湯をクッションとして使うためであると主張し,原告が主張するように,2次ボイル槽からオーバーフローした湯を回収して1次ボイル槽に回すことは衛生上問題があるとする。

しかしながら,証人A26及び弁論の全趣旨によれば,被告会社は,原告の求めに応じて,いったんは見積りを出し,追加工事として費用を請求していること及び本件装置のほかの部分においては水を回収して再利用する方法をとっていると認められることからすれば,本件装置を製作した当時,衛生上の問題があると認識していなかったことが認められること等に照らすと,被告会社の上記主張は採用できない。

ウ 殻むき機のモーターのVベルトのスリップについて

甲24の2,71,証人A16によれば,原告が,最初に交換用のVベルトの購入をしたのは,平成11年6月であるところ,原告は,殻むき機のモーターに設置されたVベルトがスリップして,何度も交換せざるを得なくなったことが認められる。

これに対し，証人 A 2 6 は，V ベルトがスリップしたのは，当初予定されていなかった大量の水が殻むき機に流れることになり，回収できなかった水がかかってベルトが滑るためであると証言する。なお，甲 7 1，証人 A 1 6 によれば，殻むき機に大量の水を投入することとなった原因は，殻むきがうまくいかず，殻刺さりを防止するために大量の水を投入したためであると認められる。

この点，証人 A 2 6 は，殻刺さりを防止するには，当初から原告が水量を確保していれば問題は生じなかったと証言し，被告会社は，水量を確保した方がよいと説明したと主張するが，本件装置を設計した証人 A 2 6 は，原告に対し説明したとは思いますが，具体的な水量を出して説明したか分からない，その数量も合っているかは分からない，原告が確保できる水量を確認したこともないとも証言している。これに加え，甲 7 0 によれば，原告は，殻むき機に新たに水を流すに当たり，パイプを 2 本も増設していることが認められるところ（証人 A 2 6 によれば，被告会社は，水が不足したため，本件装置納入後，このうち 1 本を設置した。），被告会社も，本件装置を製作する時点で，必要な水量を把握していればそれに対応する太さのパイプを最初から設置できたはずであるから，本件装置の殻むき機にどれだけの水量が必要か把握していなかったと推認される。以上にかんがみれば，原告だけでなく被告会社も，当初から大量の水が必要であると認識していたと認めることはできず，水が必要になった理由は，原告の主張のとおりであると認められる。

したがって，殻むき機に大量の水を投入したため，V ベルトがスリップし，本件装置を停止せざるを得なくなったのは，本件装置の瑕疵であると認められる。

なお，被告会社は，修理後に V ベルトに問題が生じていることについて不知とし，証人 A 2 6 は，V ベルトについて，カバーを付け，ノンス

リップベルトに修理した後（甲 7 1 によれば，この時期は平成 1 1 年 6 月ごろと認められる。），原告から苦情を言われたことはないと言証するが，原告は，その後たびたび V ベルトを購入し，補修を行っていたことが認められる（甲 2 4 の 2 ないし 6 ，甲 2 5 ）のであって，被告会社の修理によっては，瑕疵が完全に修補されていなかったことが認められる。

また，被告会社は，原告が V ベルトの購入費用を請求していることに対し，V ベルトは消耗品であり，交換が必要になると主張しているが，原告が V ベルトを購入したのは，上記認定のとおり，平成 1 0 年 8 月の設置後，平成 1 1 年 6 月が最初と認められ，それまでは交換していなかったと認められること，その後は頻繁に購入していることが認められること（甲 2 4 の 2 ないし 6 ，2 5 ）からすれば，V ベルトが一定期間経過すれば交換が必要になるとしても，交換時期が来たから交換したというものではなく，本件装置の瑕疵により交換が必要になったものと認められる。